

# 工学系学部・大学院学生を対象とした夏の学校の実施と その効果

Arrangements and Effects of Summer School for Undergraduate- and Postgraduate-Students of the Course in Engineering

○坂本 秀一<sup>\*1</sup> 佐藤 孝<sup>\*2</sup> 新田 勇<sup>\*1</sup> 伊東 章<sup>\*3</sup> 池田 英喜<sup>\*4</sup> 長谷川富市<sup>\*1</sup>  
Shuichi SAKAMOTO Takashi SATO Isami NITTA Akira ITO Hideki IKEDA Tomiichi HASEGAWA

キーワード：国際理解，国際語としての英語，学生間の国際交流  
Keywords: International appreciation, English as international language, International relations between students

## 1. はじめに

新潟大学工学部では、平成8年度(1996年)から海外の大学との学生交流協定に基づき、「夏の学校」<sup>1)-3)</sup>と名付けた交流を実施している。参加学生は主として工学系の学生で、工学系を念頭に置いた行事を実施してきた。その結果、長期の留学を望む学生が増加したので報告する。

## 2. 夏の学校の概要

夏の学校の主な相手校である、ドイツ・オットー・フォン・ゲーリック大学マグデブルグ(以下マグデブルグ大)との交流の経緯や夏の学校の詳細については文献1)-3)に譲る。行事の概要は、①授業の無い夏休みの2~3週を利用。②隔年で双方の大学において開催。③旅費は双方が自己負担。④滞在費はおおむね受入側が負担。⑤学生数は10~15人に引率者2名程度となっている。表1に参加学生数などを示す。

内容は双方で若干異なるが、①学内の研究室滞在あるいは学内の研究室・施設見学。②ドイツ語(日本語)授業・文化施設の見学。③ホームステイ。④工場見学。となっており、オフタイムに学生はスポーツや文化交流を行い、引率者は行事の今後や共同研究などを模索。

## 3. 2003年までの相互の留学生数の推移

当初、我々関係者の間では、夏の学校に参加した学生が、このミニ留学をきっかけに、その後のまとまった期間の留学へとステップアップするというパターンが一番期待されていた。実際確かに、ほとんどの年において、双方の夏の学校経験者1グループ10~15名の

\*1 新潟大学工学部機械システム工学科

\*2 新潟大学工学部電気電子工学科

\*3 新潟大学工学部化学システム工学科

\*4 新潟大学国際センター

うち1~2名は、その後の留学(ここでは3ヶ月以上のものを指す)へとステップアップしている。

しかし、それだけでは、表2のような留学生の人数にならないことは明らかである。(表2における[列]は一人の留学生を示す。)これには、以下の要因が考えられ、後の学生へのインタビューでも裏付けられた。①ドイツへ(日本へ)夏の学校で行った学生が、帰ってきてもらすロコミ効果。

②新潟での(ドイツでの)夏の学校の運営を手伝った学生が、その後、夏の学校に参加したり、留学する。

このように、この行事と、留学は良い循環で繋がってきていることが判った。

しかしその矢先の2003年に、この行事に受難が訪れた。新型肺炎(SARS)の流行である。大学内の教職員には不要不急の渡航を自粛するようなお達しがあり、この時期に学生の渡航を勧められる状況ではなかった。(実際に派遣する夏にはSARS騒動は納まっていたが、派遣の可否を決定するのは春先だったため、先方は準備してくれていたにも関わらず、学生の安全を考えると、キャンセルせざるを得なかった。)

## 4. 2003年のSARSによる夏の学校の中止・その後

表2の左側から明らかなように、夏の学校の派遣を行わなかった2003年を境に、2004~2005年はマグデブルグ大へ留学しようとする学生は現れなかった。

ところが、2005年に夏の学校の派遣を行った後、2006~2007年は、マグデブルグ大へ留学する学生が回復基調にあることがわかる。

これらのことは、夏の学校が留学への呼び水になっていたことを皮肉にも再び証明した。

さらに付け加えると、マグデブルグ大からの夏の学校の受入は中断していないため、こちらへの留学生数は堅調に推移していることも表2の右側から判る。

回
1
2
3
4
5
6
7
—
8
9
10
11
合計

5.
ド
互開
初か
考え
①お
事情
でき
②お
力に
解す
えら
③文

表1 夏の学校の各年の参加学生数など

回	西暦年		参加学生数	備考（特に表記がない場合は、新潟大、マグデブルグ大の学生）
1	1996	受入	16名	新潟大学において初の開催
2	1997	派遣	15名	ドイツ・マグデブルグ大学において初の開催
3	1998	受入	15名	新潟大学において開催
4	1999	派遣	15名	マグデブルグ大学において開催
5	2000	受入	15名	新潟大学において開催
6	2001	派遣	15名	マグデブルグ大学において開催
7	2002	受入	26名	マグデ大から15名、中国清華大から1名、韓国仁荷大から10名
—	2003	(派遣)	—	実施に向けて計画するも、SARS(新型肺炎)を懸念し派遣を断念
8	2004	受入	16名	新潟大学において開催
9	2005	派遣	10名	マグデブルグ大学において開催
10	2006	受入	9名	新潟大学において開催（当初10名が1名急病のため9名に）
11	2007	派遣	13名	派遣に向けて選考中
合計(2007年分含む)			165名	

表2 新潟大-マグデブルグ大間の留学生数の推移

西暦年	人数	新潟大→マグデブルグ大	人数	マグデブルグ大→新潟大
1996	1	1	0	
1997	1	1	1	
1998	3	3	3	
1999	4	4	6	
2000	5	5	3	
2001	2	2	6	
2002	5	5	8	
2003	3	3	3	
2004	0	0	2	
2005	0	0	2	
2006	1	1	4	
2007	2	2	4	

5. おわりに

ドイツの大学が、このような工学系の夏の学校を相互開催する相手として、非常に好ましいという事は当初から予想されていた。列举すると以下のような事が考えられた。

- ①お互いが技術立国であり、双方がお互いの国の技術事情に興味を持っているので、派遣の双方向性が期待できる（一方通行になりにくい）。
- ②お互い、英語のネイティブではないので、英会話能力にギャップがあっても、語学に対する苦労を相互理解することによりコミュニケーションの障害を乗り越えられる（国際語としての英語を認知）。
- ③文化圏、言語圏、風習などが異なるので、技術的な

ことを離れても、常にお互いが興味津々である。

以上のことにより、学生、教員同士の会話も弾むだろうし、相互の留学も盛んになるだろうと期待された。

この行事に10年携わってみて、やはりその通りだったということ、改めて実感する昨今である。

参考文献

- 1) 佐藤 孝：「マグデブルグ大学における工学系の夏の学校」北陸信越工業教育協会北陸信越工業教育協会会報第46号，pp.17-19, 1998.
- 2) 佐藤 孝：「工学部における国際交流・国際化」北陸信越工業教育協会会報第49号，pp.7-9, 2001.
- 3) 佐藤 孝、他：「工学部における国際交流・国際化」第49回工学・工業教育研究講演会，2001.